

## ラジオ修理

階下のお婆さんが、ラジオが壊れたから見てくれと言ってきた。僕はハタと困った。先日も一度頼まれて、ラジオの構造に関する知識が全く無いのにもかかわらず、いかにも一通り通じているような手つきでいじっていたら偶然鳴り出したことがあった。お蔭でその晩は大分ご馳走にもなった。

お婆さんがまた頼みに来だのは、その時の偶然の成功で信用を得ていたからなのだ。僕は仕方なく階下へ下りた。部屋に入ると息子氏がすでにラジオを分解してしまっていた。そしてどうしてもどこが悪いのか分らんと言う。僕より遥かに詳しい彼がそう言うのだから、僕に皆目分らんことは分り切っている。

しかし、僕はツバを一口呑み込んでから、仔細ありげにラジオに手をかけ、いじりまわしてから口を開いた。

「機械に異常はなさそうだね。とするとコードがわるいんだね」と言ってみた。息子氏は「そんなことはない筈だが……」と言いながら別のコードに変えたら、ラジオが急に鳴り出した。お婆さんと息子氏は、僕の「目のよいこと」に感心することしきり。ラジオ修理について再び信用を重ねることになった。罪な話。

(一九五六・一〇)